

石教研第二次研究協議会あいかとうございました

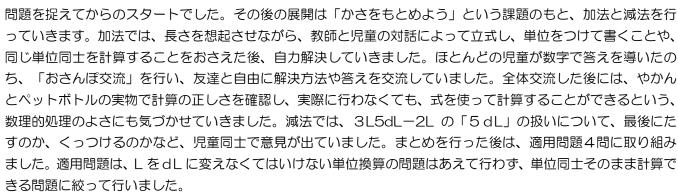
中心サークルとしてご尽力いただいた石狩市のみなさんを始め、様々な役割を引き受けてくださったみなさん、ご協力ありがとうございました。分科会での討議の一端をお伝えしますので、部会員のみなさんもふり返り、今後の実践に生かしていただけたら幸いです。

低学年ブロック 授業を参観して

いつの間にか吐く息が白くなる頃となり、冬が駆け足で近づいて来る気配を 感じるようになって参りました。今年度は、石教振の先生方にご協力をいただ き、中心サークルとして公開研究授業、ならびに提言をいただきました。この 場をお借りし、心よりお礼申し上げます。

低学年ブロックは、石狩市立双葉小学校にて、太田亜弥教諭の授業が行われました。2年生の学習『水の量』の6時間目にあたる本時は、かさについても、加法性が成り立つことを理解し、計算をする学習でした。

授業は、学級レクに麦茶を用意するという設定により、児童が自分事として



授業中は児童の集中力が途切れず、45分間しっかり問題に取り組む様子が見られました。また、書いたら自然に手をおく、次の人を自分たちで当てる、「言い方が違うのですが~」などの発表の仕方、ノートの素早い取り方など、学習規律が身についている児童たちに、とても感心させられました。



事後研では、問題の提示の仕方、数理的処理のよさへの気づかせ方、適用問題の設定の仕方などについての意見が多く出ました。問題の提示の仕方では、子どもがいかに必要感を持って問題に取り組んでいくかがとても重要という話し合いが行われました。「たし算でできるの?」と思わせるような設定や、「違いや合計を知りたい」という問題にする方法もあったのではないかという意見もありました。「同じ単位を計算する」と確認して自力解決に入ったため、交流場面では、児童同士がほとんど同じ式と答えになっていました。自由に立式・自力解決をさせて、どのように計算するか、なぜそのよ

会 場:石狩市立双葉小学校 授業者:太田 亜弥 教諭

うに計算したのかなど、交流する内容を吟味することにより、更に数理的処理のよさに気づくことができたのではという意見も出ていました。また、児童の発表で L を dL に換算する意見も出ていたので、そこを取り上げ、適用問題で単位換算の問題を行った方がよかったのではないかという意見も出されました。発想の源を問うことに関しては、適用問題を解の確認だけで終わるのではなく、なぜそうなったかを説明させることも大切なのでは

ないかという意見も出されました。

太田教諭には、石算研が提示している研究内容を意識し、多くの時間をかけて授業作りをしていただきました。参観者が、研究内容である「問いを生む問題提示の工夫」や、「数理的処理のよさ」に気づかせる方法を考えるよい機会になったと思います。また、児童が既習事項をすぐに振り返られるようなきれいな学習掲示物、練習プリントには単位をしっかり書けるような線が何気なく書いてあるなど、細かな指導の数々に日常の授業を改めて振り返ることができました。途中日光があたり、机を移動させるというアクシデントにも、最後まで集中力がとぎれない児童達。これらの態度は、一朝一夕で培われるものではなく、太田教諭の日頃の学級・授業づくりの賜物であり、本時は、そのことが参観者全員に伝わってくる授業でした。

前日が開校記念日の休みで、大変な中での授業だったと思います。快く授業を引き受けていただいた太田教諭、 当日まで準備を進めていただきました双葉小学校、石教振算数部会のみなさん、本当にありがとうございました。 (恵庭市立島松小 和泉 誠)

高学年ブロック 授業を参観して

会 場:石狩市立花川南小学校

授業者:岡渕 恵 教諭

秋の深まりを感じさせる朝、落ち着いた様子の児童と、児童の活動を丁寧に見守る授業者とで、和やかな雰囲気の中授業が始まりました。今年度の高学年ブロックは、石狩市立花川南小学校の岡渕恵教諭が授業を公開してくださいました。単元は6年生の『比』で、比の性質や比の値を活用し、全体量を比例配分する問題に挑戦する場面でした。



研究内容1に関わって、今回は単元を通し、ミルクコーヒーの配合で様々な 場面を設定してきたとのことです。ミルクコーヒー作りは、児童にとって親し みやすい題材であり、意欲化につながったことでしょう。既習事項とのつなが りや違いについて考えたり、気づいたりする中で課題解決への糸口が見えてく るであろうという、授業者の想定は「問い」を生むことにもつなげられたと思 われます。事後研では、単元後半になってくるとさすがに飽きが来てしまった のではないか、せっかく用意していた実物(うまく分離していたので視覚的に

も分かり易かった)をうまく活用できたらよかった、といった意見もありました。余談ですが、牛乳とコーヒーを混ぜても、実際には計算上の量にならないので、問題としてどうかという考えもありますが、理論上のことであり、計算という意味では特に問題は無い…かなと考えます(実際にやってみた時に「へぇ!その通りにならないんだ!」という驚きや新たな発見がありそう)。「問い」を生むために、児童の実態に応じた題材のあり方については、まだ研究の余地はありそうです。

また、「問題解決学習を基本とした指導過程の工夫」については、小さな交流を入れながら進めていましたが、授業構成としてやや単調になってしまった印象がありました。導入部分で「1あたり」の考え方に注目しすぎてしまった事も影響したのかも知れません。問題設定にも関わりますが、学習を進める上で、内発的動機を高められるようにするには、どんな活動でどんなことをよく考えさせたいか、はっきりさせることの大切さが示された部分だったのではないかと思います。

研究内容2についてです。研究内容1にも関わりますが、導入から「1あたり」の考え方で進めていたことから、解決の場面では比の形や比の値を使った多様な考え方はあまり出ませんでした。数直線をうまく活用できた部分はよかったのですが、「それでやってみたい」「使ってみたい!」という所には至っていなかったようです。また、課題提示から問題解決を経て、まとめとなっていきますが、全員が1つの目標に向かって進むというより、それぞれがそれぞれの目標に向かっ

た感じもあり、全員で課題を達成したという思いの共有には結びつかなかったような印象があります。児童の実態から、担任として苦労された部分もあったことでしょう。使ってみて「あぁ便利だな」「こんな考え方もあるのか」等々、「数理的処理のよさ」が児童による表現で語られるために、どのような取り組みが有効であるのか、参考になった実践だったのではないでしょうか。

研究の2年目ということで、昨年度からの成果や課題から、試行錯誤された部分がたくさんあったかと思います。そんな中、児童が黙々と学習に取り組み、数理的処理のよさに気づかせる授業という視点で単元構成・授業構築に挑んでくださった岡渕教諭をはじめ、責任者の加藤主幹教諭、石教振算数部会、花川南小学校のみなさんに改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

(北広島市立緑ヶ丘小 山﨑 智行)